



撮影：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)



創建された浅草の近くから築地に移ったのは1679年のこと。築地への移転は、佃島の門信徒が中心になって海を埋め立てて新たな土地を築いたことで実現した。これが地名の由来にもなっている。浄土真宗本願寺派の関東における拠点である。2014年には本堂などが国の重要文化財に指定された。近くの歩道橋からは、印象的なヴォールト屋根を持つ本堂正面が目に入る。

築地本願寺本堂

東京都中央区

四角いビルディングに囲まれた広大な敷地に、明らかに周囲とは異なる建築が存在感を持って静かに佇む。国内外から多くの人が訪れる築地本願寺本堂である。門信徒だけではなく、広く一般に開放された寺院として知られている。インドの古代仏教建築をイメージした独特のデザインは、東京帝国大学(現東京大学)名誉教授で建築史家の伊東忠太によるものだ。一六一七年の創建以来二度の焼失を経て、一九三四年に現在の建物が再建された。

日本の伝統的な木造寺院様式と全く異なる建築が生まれた背景には、伊東と当時の浄土真宗本願寺派門主である大谷光瑞の出会いがあった。お互い同じ時期にシルクロードを旅し、仏教建築の原点に造詣が深い。正門を入れて中央に見える銅板葺きのヴォールト(アーチを平行に押し出した形状)屋根、左右対称のストウーパ(仏塔)形状の鐘楼・鼓楼がこの建物を強く印象付けている。本堂に上がる正面階段の曲線形状の欄干や入口のステンドグラス、階段親柱の動物や霊獣の彫刻などからはオリエンタルな雰

囲気が伝わってくる。鉄筋コンクリート造地下一階地上二階建てだが、外壁の全面に花崗岩が使われているため、コンクリート構造には見えない。

しかし、二階の本堂に足を踏み入れた瞬間、真っ白な鉄筋コンクリートの丸柱と頭貫虹梁の巨大空間の美しさに目を奪われる。大梁はまさに柱から柱へと虹の曲線を描く豪快なコンクリートである。天井は書院造りなどで見られる格式の高い折上格天井。柱、梁と天井の間には蛙股の装飾が賑やかに展開されるなど、内観は伝統的な浄土真宗寺院の本堂形式を踏襲している。内外観が不思議なバランスを保っている建築である。